高等学校の教育旅行　特集

探究学習を取り入れた修学旅行

学習指導要領の改訂により、小中高の教育では「探究」がより重視されている。高等学校では、「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」に変更された。こうした流れから特別活動の「修学旅行」でも、今後、探究学習を取り入れた活動が活発化すると見込まれる。高等学校の修学旅行はどう変わるのか。また、探究学習を取り入れた修学旅行プログラムとはどういった形なのか。文部科学省初等中等教育局と日本修学旅行協会に聞いた。

文科省 初等中等教育局に聞く

課題発見し解決する力を育成
学習指導要領改訂で重視

――高等学校で「総合的な探究の時間」がスタートした。その狙いは。

文部科学省初等中等教育局教育課程課学校教育官・能見駿一郎氏　新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を求めている。「深い学び」の視点については、「習得」「活用」「探究」という学習の過程の中で、各教科、科目などの特質に応じた見方、考え方を働かせることで、学びの質を高めることを重視している。

これまでの「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」に名称変更をした趣旨は、学習指導要領改訂の方向性を示した中央教育審議会答申の中で「高等学校においては、小・中学校における総合的な学習の時間の取り組みの成果を生かしつつ、より探究的な活動を重視する視点から、位置付けを明確化」することが必要と指摘され、その位置づけを明確化したからだ。学習指導要領の目標規定も見直され、総合的な探究の時間では「探究の見方、考え方を働かせ、横断的、総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質、能力を育成する」ことを目指す。

同局教育課程課教科調査官・長田徹氏　「探究」は、平成10年・11年改訂の学習指導要領で、総合的な学習の時間が位置付けられたことにより全国の学校で取り組まれるようになった学習過程（プロセス）だ。変化の激しい世の中を生きていく上で必要な力、汎用的能力を育むためには、教科書に状況を見極めつつ、修学旅行の教育的な意義や生徒の心情などを考慮して、適切な感染防止策を取りながら、何とか実施してほしいと、考えている。また、感染状況が厳しく、実施が困難と考えられる場合においてもそれで止めてしまうのではなく、実施を延期したり、目を連携させて、生徒が主体的に取り組めるような活動を取り入れていくことが大切だ。これをやれば探究学習になるというわけではないが、「班別自主行動」を活動に取り入れるのは一つの大きなやり方だ。後は、事前・事後学習などを含めた形で行うことも重要になる。

――最後に、文科省として学校関係者に伝えたいメッセージは。

長田氏　学校生活を実感するチャンスを失うことになるかもしれない。だから、安易な中止ではなく、さまざまな工夫をして修学旅行を実施し、そういったことが経験できるチャンスを生徒たちに与えてほしい。

齋喜氏　修学旅行は、生徒にとってこの時しかできない体験であり、非常に教育効果が高い教育活動である。コロナの状況下であっても実施に向け、工夫してほしい。

――探究学習が重視されることにより、高校の修学旅行はどう変わるのか。また、どう変わっていくのが望ましいのか。

齋喜氏　修学旅行の中でどんな活動をするのかについては各学校においてそれぞれ判断していただくことだが、探究学習のことを考えれば、一つには、総合的な探究の時間やいろいろな教科、科目の調整になりがち。その学校生活の中で修学旅行を体験することによって秩序と変化が生徒たちに生まれる。また、学校生活の中に折り目ができる。言い換えれば、修学旅行を中止することによって生徒たちがその年代で経験しなければいけない、秩序やルール作り、折り目、さらには、学びのつながりや生き生きとした学校生活を実感するチャンスを生徒たちに与えてほしい。

齋喜氏　修学旅行は、生徒にとってこの時しかできない体験であり、非常に教育効果が高い教育活動である。コロナの状況下であっても実施に向け、工夫してほしい。

日本修学旅行協会に聞く

現地の人と「話す」ことが大事
班別活動など活発化

竹内氏

――探究学習が重視され、高等学校の修学旅行はどう変わる。

日本修学旅行協会理事長・竹内秀一氏　探究学習は、「課題を設定する」「情報を収集する」「情報を整理、分析する」「まとめ、表現をする」の四つの大きな段階から成り立っている。修学旅行は事前と現地と事後の学習をトータルにとらえなければならない。現地では特に情報収集の活動が非常に重要になる。整理・分析、まとめ・表現は学校に戻ってからの事後学習となるが、今までは感想文を書いて終わるという感じだった。学習指導要領の解説には課題解決的な学習を発展的に繰り返すことが探究学習の狙いだと書かれている。探究学習では事後の学習活動がとても重要だ。

――探究学習は修学旅行でどう展開されていくのか。

竹内氏　修学旅行では、「見る」「体験する」「話す」がすごく大事な要素だ。見るというのは見学で、これはずっと行われてきた。体験は、特別活動や総合的な探究の時間でも非常に重視されている。今後は探究学習の中で話すということが非常に大事になってくる。これは今まで「交流」と言ってきたが、現地の人々と会話をする、課題を解決するためにインタビューや調査活動をする、そういったいろいろな形が考えられる。これは対話的な学びにもつながってくる。

話すことを中心にすると40人とか学年全体とかでの活動は無理なので、班別活動やグループ行動といった少人数での活動が現地で活発に行われるようになる。

――修学旅行で実施される主な学習プログラムでの探究学習の取り入れ方を教えてほしい。

竹内氏　学習指導要領の総合的な探究の時間の解説に具体的な探究活動の例として三つ挙がっている。一つは、歴史や国際理解を題材とした探究活動。二つ目は環境や自然を題材とした探究学習。三つ目が社会との関わりを考える探究活動だ。

それを修学旅行と結び付けると例えば長崎で歴史学習を行う場合、およそ200年間あった鎖国時代にオランダや中国との貿易の窓口になったことで長崎の町や人々の暮らしがどう変わったか、それが現在とどうつながっているのか、というような課題が出てくる。長崎には歴史文化博物館や出島、シーボルト記念館、グラバー園などがある。ペーロンなどの体験活動を通して現在とのつながりを考えることもできる。また、博物館の学芸員や芸能を伝えている方々などと実際に話をしながら、生徒が自分の持っている課題を解決する情報収集活動も行える。

――環境や自然を題材とした探究学習は。

竹内氏　例えば、沖縄ではSDGsプログラムが活発に作られている。沖縄には美しい海が地球の温暖化によってどんな影響を受けているのか、それが人々の暮らしにどんな形で関わってきているのかといった大きな課題がある。恩納村では海洋環境の変化に着目した探究型のプログラムが作られている。あるいはサンゴの養殖場や漁港に行って実際に漁民の方に話を聞くこともできる。

――社会との関わりを考える探究活動は。

竹内氏　ものづくり体験がそれに位置付けられる。例えば富山の高岡は、鋳物が盛んな地域で、鋳物製作体験ができる。普段、私たちが使っている物が何を材料としてどういうプロセスを経て、どういう人たちによって作られているのか、それが分からないと例えばそれを持続的に伝えていくための課題が分からない。鋳物で言えば、鋳型を砂で作る、溶けたスズを流し込む、バリを磨くといった非常に大変なプロセスがある。学校ではできないような直接的な体験、本物の体験、あるいは本物に近い体験を通して頭の中だけではなくて五感で感じるということがすごく大事だ。

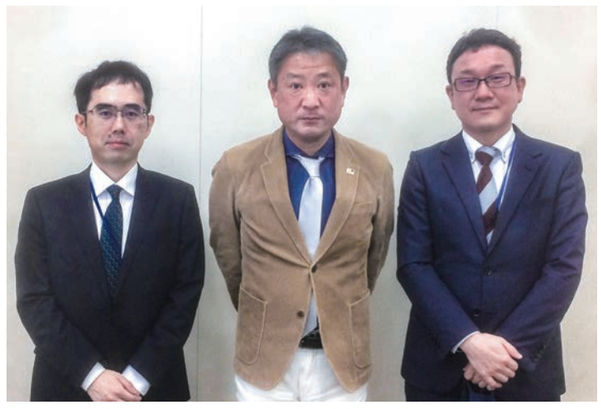
――修学旅行の探究学習に関して、学校に言いたいことはあるか。

竹内氏　長崎に行くとか大きな計画は学校が決めるのだが、ではその中でどんな活動をするのかとか、どこに行って何を見るのかというのは生徒の探究課題をしっかり明確にして行ってくれれば、より深い学びができる。

――では、受け入れ地や受け入れ施設に対する要望は。

竹内氏　話すということが非常に重要になってくるので、インタビューや調査、ディスカッションなど旅行先の人たちと交流をする機会をプログラムの中にぜひ設けてほしい。体験活動については、今までは陶器の絵付け体験などお土産づくりの体験だったが、そうではなく、しっかりと時間をかけてやる本物に近い体験活動をきちっとプログラム化してほしい。

それから、事前学習や事後学習に対して、さまざまな資料を提供する、オンラインでもいいので生徒と現地の人が交流をするといった形でのサポートもしてもらいたい。


齋喜氏（左）、長田氏（中）、能見氏（右）

沖縄恩納村でのサンゴに関する学習の様子
（写真提供　恩納村観光協会）